

相対湿度が60%以上の地点は幾つもあり、70%以上のところすらある(p.190~191)。年中霧にとぎされている砂漠地域もあれば、トルファン気象站のように野菜畑の中にある観測点(p.54)もある。乾燥地域の都市には灌漑で植樹によって緑化されている場合が多く、そういった所の気象台の相対湿度データも注意する必要がある。この問題に限らず、砂漠化問題に気象学の専門家はどのような知識を提供したらよいかを考えながら本書を読むのも面白い。

本書の難点を指摘するとしたら、まず沢山の地名がでてくるのに読者が他の地図帳でその場所を探さなければならないという点である。例えば図II-1に、せめて「河西回廊」「トルファン盆地」「毛烏素砂漠」くらいは記入しておいて欲しかった。ほとんど全ての写真は分かりやすく鮮明で見事と言えるが、例外的に判り難い図IV-5の「よくわかる」の説明はいただけない。引用されているデータに1977年とか1984年と古いのが

ある。いずれも最近出版された環境関連の書物にしばしば現れる図なので本書に限ったことではないが、枚挙にいとまのないほど沢山の国際会議が開かれながら、up to dateのデータがでてこないのは不思議である。砂漠化の場合は急速に拡大しているとは言っても大陸スケールの地図上には現われないのかも知れない。しかし、いつの時点の図かは大切なことだと思う。

砂漠化は人為的とは言っても、気象が深く関わっている現象であり、本学会にも科学技術庁・文部省の砂漠化関連プロジェクトに参加して活躍している会員が少なからずいる筈である。気象の研究目的が単に学問的興味だけと言うのでは世間は納得しないだろうし、そうあってもならない。本書には純気象学的研究成果は含まれていないが、気象学の知識を生かすことの出来る分野の理解を深める意味で、読み易く、手頃な価格の良書としてお勧めする。

(大阪府立大学農学部 小元敬男)

編集後記：「天気」の編集委員となつてから、もう1年半以上経つが、この間にいろいろな人の書いた文章を読む機会があった。最近では、仕事の上でも、たくさんの方の文章を読んで、それを修正することが多い。気象学に関する文章はもちろんのこと、会議の資料や報告書、公文書、事務連絡に至るまで多種多様である。公の目にふれる報告書や、他の機関に何かを依頼する文書などは、必ず筆者以外のもう1人あるいは複数の方が目を通し、書き足りないことを補ったり、逆に余分なことを削ったり、不適切な表現を修正したり、ワープロの変換ミスを正したりしている。実は、これらの作業は文章を書くのと同じくらい難しい。自分を第3

者の読者の立場に置いて、筆者の言わんとする事が理解できるかどうか判断し、修正の必要な部分は修正するわけだが、そのとき、筆者の文章を書く上での個性を損なわないように、修正は必要最小限にとどめるのが望ましいからだ(と私は思う)。つまり、文章の修正を行うには、筆者と読者の両方の立場を考えなければならない。でも、いろいろな人の文章を読むことで、たくさんの方のユニークな表現方法にふれることができ、自分が文章を書くときに参考になるので、人の文章を読むことは自分のためにもなる。「天気」の編集に興味のある方は、ぜひ編集委員に立候補して下さい。

(石原 洋)